

土佐町で暮らす。



土佐町の魅力の源は
人のあたたかさ、
人とのつながりです



暮らしの中で、今も薪が多く使われている。



まちの中に美しい川が流れている。

付加価値が
に向けて動い
ている最中。
ブランドを強
化し特産品と
して磨きたい
ですね。



土佐あかうしは高知県内で改良された
褐毛和種。元は使役牛で穏和。

Q 産業について
もっと詳しく知りたい

A 農業、林業、畜産業が
基幹産業。
新たな動きも

林業は特に注力している分野で
す。山の仕事は未来に向けた仕事と
言われ、3代目でやっと収入が得ら
れます。今、まちの山は3代目の時
期に入りかけているんです。雇用創
出はもちろん、山を守ることは水を
守ることもありますから、山の大切
さをまちの人にもっと知ってほ
りたい。また土佐あかうしの肥育
も重要な産業です。赤身の旨さに定
評があり、健康志向の強まりも手伝
って生産が追いつかないほど。今は
頭数増加や飼育方法も含めた「高い
付加価値」



「放課後子ども教室」では地域の人が
学校を訪れ子どもたちを見守る。

Q 教育環境の
すばらしさって？

A 保育園から高校までの
教育機関が町内に

土佐町内には保育園、小中学校が
あり、嶺北地域内では、高校までの
教育機関がすべて揃っています。土
佐町に移住した家族の親御さんが
「地域の方が『子どもは宝やき』と
言ってよく声をかけてくれるのが本
当にうれしい」と感動されていました。
まちぐるみで子どもを育ててい
る証なのでしょね。家族で移住さ
れる方は多く、そういった方々に私
たちがまちの魅力を教えてもらうこ
とも多いんです。子どもはまちの財
産。これからも地域全体で、子ども
たちを育てていきます。

Q 和町長についても
知りたい！

A 土佐町生まれ&育ちの
地元民です

最近では減少していますが、私たち
が幼い頃は湧き水を引いて生活用水
にしていたんです。町長としてはも
ちろん、一個人としても土佐町の美
しい自然を次世代に継ぎたいと思っ
ています。四季折々の景色の変化は
目を見張るものがある。春は桜、夏
は川遊び、秋は収穫祭、冬は家の中
での手仕事と、人生の楽しみは尽き
ません。そしてなんと行ってしま
う魅力は人。今を生きる人々の豊か
な暮らしはもちろん、子どもたちが
土佐町で暮らし続けたいと思っただ
きに実現でき
るような
未来を見据
えた仕組み
づくりをし
ていきたい
と思っています。
ます。



息をのむほど美しい棚田の風景。棚田
と共存するように家が建っている。

土佐町は四国の真ん中、吉野川上流に広
がる嶺北地域の一つ。豊かな自然に加
え、銀行や郵便局など暮らしに必要な設
備も整っている。地域の人々の笑顔か
ら、地元でなくとも「帰ってきた」と感
じられる、ホッとするまちだ。



豊かな自然と
子育て環境、
人のつながりが
魅力のまち
土佐町長 和田守也



Q 土佐町の魅力とは？

A スローガンは「水で活
きる」。とにかく水が
綺麗なまち

まち東部にある早明浦ダムは、西
日本一の貯水量を誇る「四国の水が
め」。四国四県に分水し、暮らしや
産業を支えると共に洪水などの災害
軽減の役割も担っています。土佐町
は20年以上前から下水道の整備をは
じめており、とにかく水が綺麗。ま
ちのスローガンも「水で活きる」で
す。水は人間の原動力の一つであ
り、美しい景観をつくる棚田もブラ
ンド米「相川米」も、美味しく飲め
る水があつてこそ。土佐町の基幹産
業である農業、林業、畜産業、最近
活発なモノ
づくり、特
産品づくり
などもすべ
て水を活か
して行われ
ています。



早明浦ダムの周りには、湖畔サイク
リングコースや桜並木がある。



1ターム
2013年
千葉県

渡貫洋介さん、子嶺麻さん

むかし暮らしの宿 笹のいえ



田舎に暮らすように
泊まる宿
〳循環型の暮らし〳
をめざして

縁側で日向ぼっこをする渡貫さん一家。
2015年の夏、民宿「笹のいえ」をスタートさせた。



渡貫さん自ら塗った
土壁には月の意匠が。



20年使っていなかった家を自分たちで改修。
五右衛門風呂も復活させた。



かまどと薪ストーブのある台所。宿では子嶺
麻さんと料理をつくる楽しみも。



まさに山暮らし。家の前の田畑で米や野菜をつくっている。

豊かさってなんだろうと考え続けたい

渡貫さん一家が暮らす「笹のいえ」は宿泊客も利用できる古民家。古き良き生活様式を取り入れた暮らしは、便利ではないかもしれないけれど、豊かさとはなにかを教えてください。

自然の中で自給自足しながら「循環型の暮らし」を夢見て2013年に千葉県から引っ越して来た。古民家を改修し、五右衛門風呂やかまどをつくり、山から湧き水を引いた。「薪をつくることは、お金を稼ぐこととそんなに変わらない。必要なものは全てここに。いい地域に来たなあ」。

妻の子嶺麻さんはマクロビオティックの世界で有名だ。千葉では母で料理家の中島デコさんと「ブラウウンズワールド」を運営。土佐町でも農を中心とした暮らしや子育てをしながら、子どものキャンプや宿泊、料理教室などを行う。



そま工房
筒井順一郎さん

地元



歴史が刻まれた
山や森は
自分が生きてあかし

「父が75年前に植え、選木した木がこんなに大きくなりました。このまま百年まで育てるつもりです」と、にっこり笑う。



伐っているのは1991年に自分が植えた木。山の時間は悠久だ。



溪流の女王あめごを養殖。自家で採卵もする。



しきびも栽培し、出荷する。米もつくる。山と農の仕事が暮らしのもの。



森の環境を守り、山と生きる

杣まとして、ずっと山と生きてきた。「守ると言うたらしんどい。自分にも何かできるという一歩下がった気持ちでおったら余裕ができる」と、筒井さん。自然と向き合う姿は哲学者のようだ。小学生の頃から父親の下草刈りを手伝い、中学卒業後、専門学校で農業を学び、父の跡を継いで約30haを保有する林家となった。

筒井さんが行っているのは山で木を見て、育てる木を選び、となりの木は除伐や間伐をしていく選木育林施業という方法。健全な森の環境を守る方法でもある。山の手入れを見ると、木が喜んでいように見えると言う。「森は自分がこの世に生きてあかし。じいさん、おやじ、ずっと歴史が刻まれちゅうのよ」と言う筒井さんは林業インターンも受け入れ中。実際に山の仕事をさせてくれる。

自然派菓子工房 ぽっちり堂
川村幸司さん、圭子さん

幸司さん
2006年
京都府

圭子さん
2006年
京都府



圭子さんのアトリエ。窓の向こうには棚田がひろがる。



ぽっちり。ちょうどよいという土佐弁

高知の野菜や果物の自然な甘みを活かしたお菓子が人気の通販菓子工房「ぽっちり堂」。贈り物として購入する人が多い「ハッピークッキー缶」のイラストは、美大出身でオーナーの圭子さんが描いている。「8年前に夫の故郷である土佐町に移住したとき新しい仕事を始めたいと思い、家で食べたい焼き菓子をづくり始めたのがきっかけです」と語る。

圭子さんは、ヒビノケイコの名でプロガーとしても人気。「全国のまちづくり関係者の方が読んでくださり、最近講演にも呼ばれるように。リアルな田舎暮らしを書いているが、『田舎の本当のこと』を知りたい人が多いんだと思う」。日々の暮らしや地域の良さを、お菓子や言葉、4コマ漫画などのイラストにして全国に届ける。

地域の素材の
良さや暮らしを
伝えます



人気の「ハッピークッキー缶」。



ぽっちり堂。幸司さんのおばあちゃんが住んでいた家だった。

地元



自分たちで学んだ
農業や山暮らしの
技術を次の担い手へ



真っ赤に色付いたトマトは本当に甘い。「豊喜さんと計美さんのトマトや!」と子どもたちもすぐにわかるほど。



和田農園の野菜づくりのキャッチフレーズは、「安全・安心・おいしい」。都会で買う野菜と食べ比べて、味の違いにびっくりする人も多いという。

収穫中、おしゃべりをしながら、でもいつも手は動いている。夫婦二人三脚で暮らしをつくってきた。



「和田ブランド」から美味しい野菜を

青空と棚田の景色が見える山腹でトマトを育てているのは「和田農園」の和田豊喜さんと計美さん。育てている「リコピートマト」には抗ガン作用の強いリコピンがたっぷり。「トマトの栽培を始める前まで営んでいた畜産業では常に病気と戦い、抗生物質に依存しなければならなかった。トマトと野菜はなるべくそれに頼らず育てたい」と農薬と化学肥料の使用は最小限にしている。トマトは暑さが大の苦手なため、寒暖差のあ

る山地が栽培には適しているようだ。

和田農園への信頼は厚く、採れたての野菜は独自の販路で販売。「自分たちの農業や暮らしの知恵を次世代に伝えたい」と移住者やインターンシップを受け入れ、農業体験も提供している。お山のお父さん、お母さんの存在だ。



山での暮らしは自給自足。本を読んだだけでは分からない、楽しさや厳しさを感じることができる。

地元

社会福祉法人 土佐町社会福祉協議会
上田大さん



地域の人が相談にやってくる。



農作業に使った背みのを編む技術を残したいという声から保存会ができた。



地域の役に立てることがうれしい

集落総出で道の刈り上げ。必ず参加することが大切。



社協は土佐町役場のとなり。

お年寄りと移住者をつなぐパイプ役

地域の若手の中でもリーダー的な存在の上田さんは土佐町で生まれた。大阪に設けた土佐町の産直サテライトで働いていたが都会よりもやっぱり、ふるさとこそが自分の居場所だと感じ、Uターン。現在は、まちおこしの活動とともに社協職員という仕事を通じて、地域の高齢者と移住者をつなぐパイプ役を担っている。

「移住者の皆さんは、このまちに残る文化や知恵に興味がある。それが地域の人にとっては自信になるし、必然的にお年寄りとながるので、ぼくら社協のはたす役割はすごく大きい。若い人のチカラを借りないとなかなか継承していけない」。最近、若者とお年寄りが集まって「背みのづくり保存会」をつくった。地域の役に立てることにやりがいを感じている。



こだわりの巨峰農園 MISHIMA FARM
やまなかとしお
山中敏雄さん、こずえさん

敏雄さん
1ターン
2013年
福岡県

こずえさん
地元



地元のブドウと
ソフトクリームを
食べにいっぺん
来てみよう

毎年多くの人を楽しみにしている巨峰は甘さに深みがある。農園内にある手づくりのプリンは子どもたちに大人気。



8月～10月には地元で大人気の「巨峰ゼリーサンデー」を、冬季は白玉ぜんざいやホットタピオカを販売。



看板メニューのれいほく高原牛乳が入った「れいほく牛乳ソフト」。素材の味を活かしたさわやかな甘さが人気の秘密。



冬に比べて、夏はブドウの収穫期とソフトクリームの繁忙期が重なり夫婦で大忙し。

べる人にも負担になる」とこずえさん。土づくりから収穫まで、自然のバイオサイクルの力だけで行う。清流・吉野川から水を引き、天然ミネラルが豊富な山水を使用した巨峰の糖度は、平均値を上回る18〜23%。甘い香りと上品な深いコクのあるブドウは夫婦の努力の結晶だ。

夫婦でつくる土佐町生まれのグルメたち

「ブドウは無農薬で育てることが非常に難しい。けれど先代が身体を壊したことがきっかけで、一粒もブドウの実がみのもなくとも農薬を使わないのは夫婦の約束事になった。「農薬はつくる人にも食



無農薬の「奇跡のブドウ」をつくる農園「MISHIMA FARM」は「道の駅土佐さめうら」の隣に位置する。敷地内には珈琲茶房・甘味処&宿泊施設の「地藏庵」が併設されており、ドライブついでに立ち寄る人も多い。

1ター
2013年
東京都

モノづくり
生活

季節の焼き菓子OriOri
せんだ
仙田聡美さん



食べ物で身体は変わるんだな

地元の人々によるイベント「お山のてづくり市」で焼き菓子を売ると、お客様が笑顔になる。その様子を見て「田舎では素材がすぐ近くにある。それをどう生かすか考えるのが、すごく楽しい」と仙田さん。震災後、東京で開かれた移住相談会で「田舎暮らしネットワーク」に出会い家族4人で移り住んできた。「同じような理由で移住してきた人に会わせてくれて、知りたいことをなんでも聞けた。いまでも移住者ならではの悩みを相談できたり、移住者と地元の人を橋渡ししてくれたら、やっぱり人は大事」と話す。

今春からパン屋さんで働きながら焼き菓子の販売にも力を入れていく。自分で野菜づくりもするようになって日々思うのは「食べるもので身体は変わるんだな」ということだ。

仙田さんのお菓子は「季節の焼き菓子OriOri」という。乳・卵・白砂糖は使っていない。となりは同じく移住して来た人の店で家もとなり同士。嶺北は移住者のネットワークが強い。

移住前、
知りたいことを
何でも聞けた



友人がつってくれたカードは宝もの。



季節ごとの素材を使ってつくる焼き菓子は種類もさまざま。



土佐町産の新鮮な巨峰を使ったマフィン。

モノづくり
生活

アーティスト
かわはらしよした
川原将太さん

1ター
2015年
大阪府

絵を描きながら
世界を旅して、
土佐町に
辿り着きました



広々とした自宅の一角が陶芸と絵の作品の展示スペースになっている。



ろくろを回し絵を描く。絵のデザインはすべて違って、世界で一つだけのオリジナル。



陶芸のアトリエにて。毎日こつこつと作品と向き合う。オーダーもできる。



アートで人が集まる広い場をつくりたい

京都の大学を卒業後バックパッカーとして6年ほど海外を放浪していた。旅の絵描きになりたいと思ったからだ。アーティストの川原将太さんは、アートの集中できる環境と心地いい暮らしを求めて、高知県土佐町に辿り着いた。以前は「極める」ために絵を描いていたが、高知に来てからは「極める」と「稼ぐ」の両方を追い求めてものづくりをする。「世間の人がいまいるアートは命がけで作品をつくる人。僕もず

っとそうしてきたけれど、いまはものづくりで生計を立てる仕組みをつくって若手のお手本になりたい」。土佐町はアート、ライフスタイル共に学ぶことが多い。次にやりたいことはチームでものづくりをすること。アートを通してまちに人が集う未来を思い描く。



川原さんの作品の特徴は、なんといっても鮮やかな色使い。ほぼ独学の陶芸は絵を描く以外のことをしたくて始めた。刺激を求めてあちこちを転々としていたが「土佐町ではなにか新しいことができる気がする」と工房を構え、創作活動をおこなう。



1ターム
2012年
東京都

モノづくり
生活

フリーランスデザイナー
なかやまかずとし
中山一利さん



パラシュートのコードを使った「パラコードブレスレット」も中山さんによるデザイン。紙媒体以外のジャンルにも活躍の幅を広げる。



イベントのチラシや
土佐町の物産品の
ラベルをつくります



いも焼き菓子「ひがしやま」のラベルとチラシ。生産者のなほちゃんの似顔絵がモチーフ。



町内で見かけるイベントのポスター。「かずさんがつくったんやね」と、まちの人もすぐ分かる。

まちの人に届く遊び心のあるデザインを

中山一利さんは、土佐町を気に入った奥様とともに東京から移住。いまやイベントのチラシやポスター、パッケージデザインを担当するなど土佐町には欠かせない存在だ。「東京での仕事は、数字目標を達成するためのものでした。でも土佐町では発注元の方も制作物を届ける方も顔が見えるので、一つひとつへのこだわりが増します」。まちの人々との暮らしは、仕事だけでなく遊びも大事。部屋にこもりきりではなく写



真を撮影しに行ったり、仕事が早く終わる日は畑仕事をしたり仲間と近所の山に入ることも。「土佐町の人は誰に対しても壁を感じさせません。仕事も知人や友人のためという感覚。ありきたりのものではなく、僕だからできるデザインを目指したいです」。

年齢に関係なく、自分の暮らしは自分でつくる「姿勢」



人の話を聞こう

土佐町唯一の保育園「みつば保育園」が大事にしていることの一つは絵本の読みかせ。「人の話を聞くことや、自分の思いを伝えられる子どもに育ってほしい」と副園長。自然の中で友達と関わりながら、その子らしく主体的に遊ぶことも大切にしている。

安心安全なごはん

園内にある調理室では、地元のものを中心に食材を入れ毎回栄養バランスや旬を考え、ていねいに手づくりされている。子どもたちも給食が大好き。器を持って自分でおかわりを取りに行く。活動の中で田植えやクッキングを行い、食育にも積極的に取り組む。

土佐町のみつば保育園



園内の遊具は少なく、どれもシンプル。子どもたち自身が自由に遊びをつくりだす。



土佐町の小・中学校

「顔が見える」学校

土佐町立土佐町小中学校は、小中の校舎が一ヶ所にまとまっている。全校児童・生徒は合わせて約230人。決して大きくないけれど地域の人々や保護者もボランティアで授業や放課後活動に参加。信頼の厚い学校だ。「人数が少ない分、保育園から中学まで枠組みを越えて子どもたちの良いところや課題の情報共有ができません」と唐岩校長先生。小中学校の校長を兼任し、個人が持つ力を存分に伸ばす教育を目指す。



土佐町小中学校の唐岩隆之校長。過去にも土佐町中学校で12年間勤務していた。



小中学校はクラス25人前後。地元の木で作られた自分専用の机を6年間使う。



自分で考える力を育てる

土佐町小中学校の校訓は「自主・協同・創造」。テストの点数を取るためだけの学習ではなく、自主的に考える姿勢を養う。例えば、始業のベルはなく子どもたちは自分で時計を見て授業の準備をする。ちょっとしたことでも意識は変わっていくようだ。さらに、保育園から中学まで一貫して注力しているのは読書。小学校校舎の廊下にはたくさんさんの絵本や小説、新書も並ぶ。毎年、子どもたちで選書会をして購入する本のジャンルは年齢を問わず興味をそそられる内容だ。

地元に着用を持ってほしい

小中一貫だが、6年生になると卒業式がある。進学のためまちを出る子どももいる。けれど唐岩校長は「小中の9年間を通して地域のことを学ぶ授業も行います。広い視野で学びつつ地元が好きだという子が一人でも多く巣立ってくれたら」と話す。地域の未来を思い描きながら、子どもたちを見守る眼差しはあたたかい。

憩いの場 とんからりんの家



人生を楽しむ尽す

地元有志による、生きがいづくりのための福祉施設。「とんからりん」の名前の由来は、「隣組」という歌の歌詞から。食事、体操、レクリエーションなどを通して、地域で暮らす高齢者が毎日を楽しめる場をつくりたいと、ボランティアメンバーが運営している。



長く続く場づくり

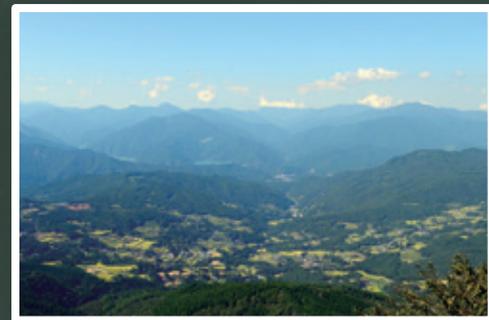
補助金に頼らず、地域住民が力を合わせてつくってきた。運営費用は参加費と応援費でまかなう。中には「お米会員」としてお米を2升収める人も。町内外から注目を集める存在に成長し、現在では海を越え、幸せの国プータンから視察隊が訪れることもあるという。



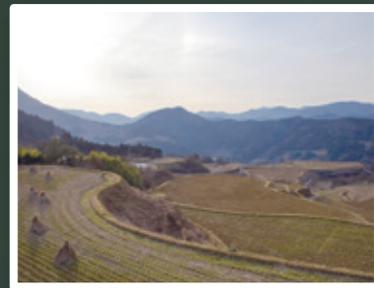
料理や手芸、体操など参加者の「やりたい」思いを積極的に取り入れ活動する。

移住支援で全国から注目を集める土佐町。地域の人、移り住んで来た人、どちらにとっても居心地のよいまちだ。両者をつなぐのは2007年に設立されたNPO団体の「田舎暮らしネットワーク」。活動の軌跡と未来への展望をうかがった。

住んでみんかよ土佐町に！が合言葉



土佐町は大豊インターから約20分と好立地。中心部には病院やスーパーも揃う。



青空に向かって耕された美しい棚田は、全国棚田百選にも選ばれている。

移住者と地域に寄り添う

吉野川上流に広がるれいほく地域の一つ、土佐町。まちの豊かな自然に惹かれて移り住んで来る人が年々増え、移住者の数は、2016年3月現在で186名。県内でもトップクラスの多さだ。土佐町が移住先として魅力的な理由の一つに、NPO団体「れいほく田舎暮らしネットワーク」の存在が挙げられる。移住希望者に、まちのことを知ってもらい、地域の人々と移住者をつなぐ活動をしようとして、地元住民の有志によって立ち上げられた。

「移住後、どう地域とつながるかも大切ですが、土佐町は地元の方があなたかく見守ってくれたり、応援してくれたりする人が多いまちなんです」というのは、田舎暮らしネットワークの事務局長である川村幸司さん。移住希望者に何度もヒアリングをし、その人それぞれにあった先輩移住者や集落を紹介するなど、きめ細やかな対応をしている。

住民一人ひとりが主役のまち

土佐町には若い人が挑戦しようとすることを「まあ、やってみいや」と応援してくれる風がある。地元の方とともに、地域づくりの活動に参加する移住者が、他の地域より比較的多いのも土佐町の特徴だ。両者が歩み寄り、協力する姿勢が居心地のよさをつくり出している。



土佐町では農林業体験やインターンを受け入れている農家さんも多い。



「お山の手づくり市」には、まちの人々が手づくり雑貨やお菓子を持ち寄り出店する。毎回、約30組が出店し大人も子どもも楽しめる。



暮らしのなかで気づいたことや、思いを語らうワークショップも開催。

縁をつくり、人をつなぐ

田舎暮らしネットワークでは、空き家や暮らしの情報を提供したり、都市部からの移住希望者の対応や移住のコーディネートをしたりしている。こうした移住後の暮らしのフォローもしてくれる存在は、地域の人々との架橋となり、移住者たちにとっても心強い。

「田舎暮らしネットワークは、一緒に地域をつくろうと思っている地元の人や移住している人が入りやすい、開かれた状態であるよう心がけています。移住前から実際に会って話し合うことを大切にしている理由は、その人とこ縁ができれば移住への不安が軽くなり、移住後も安心して暮らしやすくなると思うから。私たちは移住支援を、この地を大切に思いながら暮らす人を増やすことだと考えています」と川村さん。

さらに「土佐町は、地元の人々が若者を応援してくれる雰囲気があるのに加えて、人材は宝」という意識がもともと強

い」と川村さんが話すように、子育て環境がよいのもこのまちの特徴だ。保育園から高校まで、地域の人々と親や先生が連携をとっている。そのため、家族で移り住む移住者も増えた。こうして、さまざまな年代の移住者が集まるにつれ、地元住民の理解は、より重要になってくる。田舎暮らしネットワークでは、移住者に対してのみならず、長くまちで暮らす人々への配慮も忘れない。

「田舎では、みんなお互い様の中で生きています。今後、どこで暮らすにしても、人と人とのつながりから生まれる豊かさや、より重要になってくると思います。これからの未来をかたちづくる地域活動を、地元の人や移住者も一緒に、楽しみながら取り組んでいきたいですね」。田舎暮らしネットワークをはじめ、暮らす人々の縁を大切にしている土佐町。人と人とのつながりは、未来に向けたまちづくりの重要な土台だ。土佐町の今後から、ますます目が離せない。

百万遍みそ



まちの無形文化財にも指定されている百万遍祭りが開催される、南川地区。その地域のお母さんたちが共同で手づくりしているのが、昔ながらの田舎味噌「百万遍みそ」だ。1966年から少量生産でつくっており、販売もれいほく地域のみに限られているが、手づくりの安心感から多くの人に愛される調味料の一つだ。地元のスーパーでも買うことができる。一回の仕込みにつき4日かかり、2月から3月にかけて何度か仕込みを行う。800g入りパック617円
 道 道の駅土佐さめうら ☎0887-82-1680

土佐あかうし



年間500～600頭しか出荷されない、幻の和牛と呼ばれる土佐あかうしは、明治時代から使役牛として大切に飼われてきた。急斜面の多い山間で育てられ、ジューシーでさっぱりとした赤身はアミノ酸やオレイン酸が多くヘルシー。現在は牛糞を25日かけて発酵させ肥料としてリサイクルしたり、増産拠点として農業生産法人「れいほく未来」が畜産基地を整備したりと、あかうしを土佐町の名産品として盛り上げるべく、取り組みがますます活発になっている。
 JA土佐れいほく農業協同組合 ☎0887-82-2803

川原将太さんのマグカップ



世界で活躍する若手アーティストの川原将太さんは、絵描きとして世界中を飛び回っていたが、約1年前に土佐町に移住し、独学で陶芸を学びながら創作活動を行っている。ハツとするようなビビットカラーが特徴の川原さんの作品が購入できるのは、ネット販売と道の駅土佐さめうらだけ。一つひとつ土佐町のアトリエで焼き上げ、色付けも手作業で行うため、絵柄や大きさはそれぞれ違い、どれも一点もの。1個2400円～
 道の駅土佐さめうら ☎0887-82-1680

サメウラマニアックTシャツ



4年前に東京から土佐町へ移住してきた、デザイナーの中山一利さんと「道の駅土佐さめうら」の和田駅長が企画した地元ブランド。ミリタリー&パンクテイストなグッズがずらりと並び、どれも遊び心いっぱい。Tシャツのほかストラップなどもあり、なかでもプレスレットはパラシュートのコードを利用した素材で和田駅長みずから編み込んだ手づくりで、緊急時にはロープとして使えるすぐれもの。1枚2484円/S～XL 黒とオリーブの2色
 道の駅土佐さめうら ☎0887-82-1680



いいもの うまいもの

土佐棚田の米 こだわりの



れいほく地域には標高300～600mに棚田が広がっており、そこで収穫される「土佐棚田の米」は、昼夜の寒暖差によって凝縮された甘味が特徴だ。低農薬で育てられ、安心安全なお米は地域の内外からも信頼が厚い。「土佐棚田の米 こだわりの」は、土佐町堆肥センターで製造した栄養満点な土佐あかうしの堆肥で育てられている。肥沃な土に加え、山間に流れる川の綺麗な水と空気も、美味しさの秘密だ。
 「棚田の米」5キロ2400円
 「こだわり」5キロ2500円
 JA土佐れいほく農業協同組合 ☎0887-82-2803

実正のゆず酢



一般的に柚子は実るまでに15年以上かかるとされているが、高知は独自の技術を開発し、5年ほどで収穫できるようにした。今では高知は全国で生産されるゆずの40%を占めると言われるほどの産地。地元の人々も柚子酢が大好きで、どこの家の冷蔵庫にも柚子酢が入っているという。酢の物や寿司酢などの代わりに、どんな料理にも柚子酢を使う。地元産の柚子をしぼってつくられた無添加のゆず酢は、鼻に抜ける酸味がツンとし過ぎず、やさしい。360cc 700円～
 道の駅土佐さめうら ☎0887-82-1680

手織り木綿「さ、布」の三角小物入れ



土佐町の手織り作家である山中結花さんが、綿からつむいだ糸を地元の木の皮、葉や草を使って草木染めにし、手織り機で織った布でつくった小物。綿から紡いだ糸は、日照時間の長い夏に染められる。素材の組み合わせ次第で無限に色をつくることができ、自然の恵みの配色と肌触りは、やわらかい風合いだ。道の駅では財布やペンケース、コースターなどが置いてあるが、工房「さ、布」では小物のほかにも反物やバッグを販売している。1個 1620円
 道の駅土佐さめうら ☎0887-82-1680

稲村さんのサンタクロース



土佐町で木工として働く稲村道男さんが、手づくりしている木のサンタクロース。おもに町を囲む山で間伐した、山桜の木を使い、きれいに表面を削ってつくる。一つひとつの顔は稲村さんの手描きのため、どれも表情が違い、あたたかみが伝わってくる。稲村さんは机や椅子、木を使った小物をつくったり、イベント時には子どもたちに木工を教えたりしている。木のサンタクロースはクリスマスの時期に合わせて製作し、道の駅で販売している。小300円～大1800円（オーダーも可）
 道の駅土佐さめうら ☎0887-82-1680

アクセスマップ

四国の中央に位置し高速道路へのアクセスも容易なため各地に車移動しやすくなっています。



鉄道

JR土讃線を利用する場合は、大杉駅で下車。大杉駅から土佐町中心部までバスで25分。岡山駅—大杉駅まで特急で約2時間。高知市から特急で30分。

車

高知自動車道大豊インター下車。国道439号で土佐町中心部までは20分。岡山から大豊インターまで約85分。東京、大阪、名古屋、岡山を結ぶ高速バスも利用できる。



土佐町役場 産業振興課

〒781-3492 高知県土佐郡土佐町土居194
 TEL : 0887-82-2450 FAX : 0887-70-1333
 E-MAIL : iju@town.tosa.kochi.jp
<http://www.town.tosa.kochi.jp/>